
探偵の休日。

月下の奇術師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

探偵の休日。

【Nコード】

N2191L

【作者名】

月下の奇術師

【あらすじ】

新一君の誕生日！とゆうことで、特別に短編小説かきました。よかったです目を通して見て下さい。

今日はやけに暇と言っているほど何もない。

組織を倒し、元の姿に戻った俺は、また好調に探偵として名をひろめ、毎日と言っているほど事件に行っていた。

そんな忙しい毎日を送っていた俺に今日、ぱったりと何もなくなっ
てしまった。

蘭に電話でもしてみっか……

プルルルル♪

蘭「もしもし？ 新一？」

電話の向こう側から何やらガヤガヤと物音がする。

新「俺だけど、蘭今暇か？」

周りの物音で忙しいんだと予想はついたものの、ダメ元で聞いてみた。

蘭「ごめん新一……今日ちょっと忙しくて……あつ、夜は暇だからそ
っち行っているかな？」

新「そうか…いいぜ？今日は何も無くて暇だからな」

蘭「ありがとう、新一！じゃあ、7時ぐらいに行くね？バイバイ」

一方的に電話をきられてしまった。

7時か…まだまだ時間あるじゃねーか…

今はまだ午前10時。

蘭が来るまで結構な時間があった。

次は服部に電話をかけることにした。

新「もしも…し？」

『おかけになった電話は電波が届かないところにいるか、または…
……』

新「服部もかよ……んじゃあ次は……」

次にかけた相手は快斗。

新「もしもし？俺だけど……」

快「新一？今は待ってくれ！マジックの練習中だ」

新「あっ悪いな……じゃ」

暇そうな奴等にも連絡をしたが暇な奴は0人：

暇な日に暇な人が1人もいないのは本当に珍しいことだった。

4

よりによってこんな時に誰も暇な奴がいねーんだよ……

蘭が来るまで推理小説でも読んでるか……

部屋の壁に埋め尽くされている推理小説の中から適当に選び、自分の部屋へ戻りベッドの上で読み始めた。

時間は過ぎ、蘭が来る5分前……

新「やっと7時か……」

この時間まで2シリーズの推理小説を読み終えていた。

ピンポーン♪

どうせ蘭だろう……

新「いいぜ？入ってこい!!」

蘭だと思っていたので俺は油断していた。

？「泥棒を勝手に上げていいのですか？」

新「怪盗キッド!？」

？「フフフ♪何騙されてんのよ!!探偵失格よ?」

新「なんだ蘭か……」

そう、蘭は快斗にキッドの衣装を借りて新一を驚かせに来た。

蘭「そうよ。もっと早く気づきなさいよ！！あとこれだけじゃないから。ついてきて？」

意味もわからず蘭についていく。
と言っても行き先は博士の家だった。

蘭が俺に向かって軽く笑みをこぼした。
その蘭の目は何かを企んでいる目はだった……

その理由は俺が忘れていた特別な日であったから。

蘭が博士の家に入り、俺もつられて一緒に入る。
すると突然、リビングの前で止まった。

新「何すんだよ……」

そんな俺の言葉も聞かずカウントを始める。

蘭「3・2・1……」

ガチャ……

パン、パン、パン！！

「「誕生日おめでとう（ございます）！！新二（工藤）（新一お兄さん）！！」」

新「はぁ……！！」

蘭「やっと気づいたの？本当、毎年新二は自分の誕生日忘れるんだから！！」

新「ん？蘭が2人……！？」

俺と一緒に来たはずの蘭がリビングの中にもう1人……
探偵の頭脳をフル回転させる。

快斗がどちらかの蘭に変装しているのは一目瞭然。
果たしてどっちが本物の蘭なのか……

新「お前快斗だろ？」

快斗だと言ったのは一緒に来た蘭のほう。

快「お見事♪どうしてわかった？」

新「俺が毎年自分の誕生日を忘れてんのは本人の蘭しか知らねーよ。
第一お前と知り合ったのは俺がコナンになってからだ。その前は知
らねーだろーが」

快「そうゆうことね……んじゃあ主役さんも来たし、誕生日パー
ティー始めようぜ？」

「「賛成！」」

それから工藤新一の誕生日パーティーが行われた。

新「もしかして、今日誰も暇な人居なかったのは、この為か？」

平「そうやで？わざとや！事件に呼ばれなかったのな」

蘭「頼んだんだからね。今日ぐらいいはゆっくりできるように」

快「なのに新一はずっと推理小説読んでるしな」

そんな話題で盛り上がり、パーティーの後半。

快斗のマジックショー。

快斗からはマジックで出した新作の推理小説を誕生日プレゼントとしてもらった。

服部からは大阪のお好み焼き。

歩美、光彦、元太からはサッカーボール。

そして、最後に蘭から。

渡されたものは、

“レモンパイ”

新「ありがとな？」

蘭「それだけじゃないよ。これも」

蘭から渡されたのは、Tシャツだった。
それも赤いTシャツ。

新「それ……」

蘭「だいぶ前だけど、新一に赤いTシャツ渡せなかったでしょ？だから」

新「本当ありがとな！皆も」

そうして探偵の特別な日が終わったのだった。

蘭がなぜ赤いTシャツを新一にプレゼントしたのか……
蘭は密かに自分の思いに気づいてくれることを願っていた。

(後書き)

皆さん!!

今日はどんな日かわかりですよ?

そう!! 新一君の誕生日!!

《誕生日おめでと〜♪》

平次君からのプレゼントのお好み焼きだった理由…
お好み焼きオデッセイを見た方は想像つきますね?
なぜ私がプレゼントにさせたのか。

蘭の思いは劇場版名探偵コナン第1作目の最後を見ればなんとなく
わかるかもしれません!!

それでは(＊＾＾＊)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2191/>

探偵の休日。

2011年10月6日06時13分発行